

## 小谷遺跡 (こやついせき)

小谷遺跡は、袖ヶ浦市永吉に所在し、小櫃川下流域の北側台地標高約 55mに位置しています。

当遺跡は、ミニゴルフ場建設工事にともない、平成2年度に調査されました。

発見した生活跡は、主に住居跡で弥生時代中期（紀元1世紀前半頃）9軒、平安時代（9世紀後半から10世紀前半頃）16軒です。

弥生土器（<sup>つぼ</sup>壺・<sup>かめ</sup>甕・<sup>こしき</sup>甑・<sup>はち</sup>鉢）、土師器（<sup>は</sup>坏・<sup>わん</sup>椀・<sup>だいつきつき</sup>台付坏）・須恵器（<sup>すえき</sup>坏・<sup>ひら</sup>皿・<sup>かめ</sup>甕・<sup>こ</sup>甑・<sup>ちようけいこ</sup>長頸壺）

などの生活道具が発見されています。

土器の様相から、当遺跡は短い時期にわたり小規模な単位の村として営まれていたことがわかりました。

### 用語解説

※甑・・・米を蒸すための土器。土器の底に蒸気孔が開けられ、すのこをすえ、米が置かれ、水を貯えた甕とともに蒸し上げていました。

※土師器・・・古墳時代から奈良・平安時代まで作られた土器の総称。

※須恵器・・・古墳時代中期（5世紀）、朝鮮半島から伝わった焼物。<sup>かま</sup>窯で焼くため還元焼成となり、色調は青灰色となる。



小谷遺跡空撮（南側上空から撮影）



小谷遺跡空撮（東側上空から撮影）



住居跡の上部がカマド

21号住居検出状況（平安時代）

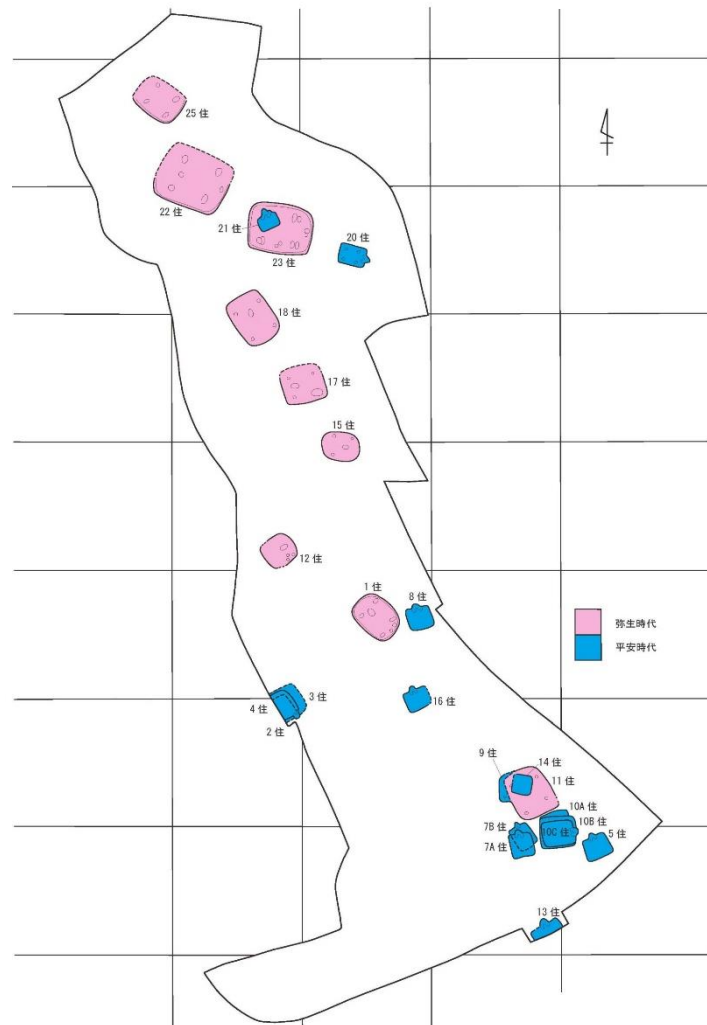


13号居はカマド周辺から多くの土器が出土しました。

13号住居カマド周辺遺物出土状況（平安時代）



小谷遺跡位置図及び周辺遺跡分布図



小谷遺跡遺構配置図